

そして、同じく問題にした「大路所思」もこれらの観点からオホヂシオモホユと訓むべきも自明の理と言える。

(三)

以上、訓添え、改訓によつていくつかの問題にふれてきたが、いわゆる上代人の、言葉の表現に対する意識は非常に強く、助詞・助動詞一つにしろ、当時の構文法に従つて無理なく、扱われていたと言える。そしてそれらは、歌を表記する場合の用字意識にもつながり、表現法、用字法等がともに把握されて、当時の人々の理解の基となつていた事は言うまでもない。モーカーモヤモーカー等の呼応関係に於ける一方の表記省略、又、ク語法に見られる種々の慣用句、そして準不足音句が問題の中心となる：シオモホユ等の統一された表現法、等特に上代に於ける助詞シは文中で一種の係結び的役割を果していると考えられ、ネノミシナカユ。イメニシミュル等の慣用句の多い事からも領づけられるではあるまいか。

要するにこれから上代の表現法は、種々の形で把握されており、上代人の言語に対する意識の中に確実に反映していた事が分るのである。

平家物語序章の研究

丸 山 千 鶴 子

(一) 序

「平家物語」といえば、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」の書き出しをすぐに思い出す程、それは我々の間に親しまれた書き出しである。そしてこの序章は「平家物語」を貫いている諸行無常の仏教哲理を表現し、又「灌頂卷」の厭離穢土、欣求淨土なる経生思想と照応していると考えられてきた。しかしその常識化された考えが果して正鵠を得たものであるか、又序章の表現はそれのみに終つているのか等と、(一)、序章の解釈とその典拠、(二)、無常観について、(三)、方丈記の序章との比較、(四)、平家物語における序章の意義、等の方面から研究して、序章の持つ意義について改めて考えて見たいと思う。

(二) 本 論

(1)、序章の解釈とその典拠

「平家物語」序章の部分は、現在残つている平家諸本の代表的なものと比較してみても、さしあたり本文的には問題のない文章である。よつて覚一本系統の龍谷大学図書館所蔵の平家物語を底本とする「日本古典文学大系33」によつて研究していく。

その主な大意は、人が諸行無常盛者必衰の道理に抗し得な

かつた例として、最近の平清盛の運命ほど言語に絶したものはなかつた。平氏は桓武天皇から出ているが、我々の官職は諸国の受領であつた”という事である。

この句は（平曲では章の事を句という）平曲の方ではいわゆる秘事の一つで「延喜聖代」とともに秘事となつてゐる。だから古い譜本には見えない筈であるが、他の秘事を載せない本でもこの章は書いてあるのは纏まつた作品としての「平家物語」では、この序は欠く事のできない章だからである。そしてこの「祇園精舎」全体をこの「平家物語」全篇の序と考えられてきたが、内容的に考えてみると作者が序としていたかつた事は、

“人が諸行無常盛者必衰の道理に抗しえなかつた例として最近の平清盛の運命ほど言語に絶したものはなかつた”を大意とする迄で、「祇園精舎の鐘の聲」から「伝承ること詞も心も及ばれぬ。」迄のみを全体の序とみた方がよいのではなからうか。それ以後は第二章「殿上闇討」のはじめに附けるのが当然ではないだろうか。つまり「平家物語」の章段の分け方はただ平曲として琵琶法師が一纏めとして語る部分に適宜に題を附けて纏めてあるとみるべきで内容上からいうと章段の分け方に適当でないところが多々みられ、こゝもそうみてよいのではなからうかと思ふ。

「平家物語」巻頭の序章は平家論の手がかりとしてしばしばとりあげられてきている。最近の「平家物語」研究の

一つの決算書ともいふべき日本古典文学大系においても「平家物語」序章の「諸行無常の響あり」の補註として、この冒頭の対句をいかに解釈するかということとは平家物語一篇の受け取り方をきめる重要なきつかけになる。

（中略）ただ作者がこゝ人々の句をおいた事によつて吾々は仏教上の無常観が観念的に説かれてゐることに満足すべきではなくて、そこには作者が『平家物語』という或る大がかりの物語を語ろうとするいわば説話文学者の姿勢が隠されている事を知らなくてはならない。（中略）随つて作者はこの無常観を単なる思想としてはだかにして受けとつてはならない。（註1）

とし、だからもしこの句にそうした文学的関連を認めないとすれば、殿上闇討の忠盛をはじめとして、次々に登場する諸人物の人間像の受け取り方も又、著しく思想的、非文学的に傾きつけかけを既にこの発端から作ることになる。とするような注目すべき見解が展開されている。

つまり「諸行無常の響あり」にしても、単に「諸行は無常である」といふようなはだかの無常観を説いているのではなくて、經典の中に語られている不可思議靈異の物語としてのそれである。物語の作者がこの話をどこから学んだか恐らく当時一番広く行われていた「往生要集」かららしいが作者がこゝで持出している「諸行無常」はこのような祇園精舎物語の中のそれであつて単なるはだかの無常観では

ないというのである。

又、「盛者必衰のことはりをあらはず」にしても「勢の盛んな者も必ず衰える時がある」という様な単に仏教上の盛者必衰觀を悟らされる事に読者は満足してはならないのである。即ち作者は涅槃物語を思い出させようとしているのであり、単に榮える者は決して衰えるというような原理を説くために、それを世上一般の花の散りやすいことに譬えたりしているのではない。もつと説話文学者らしくこの奇蹟的な変色物語を提供して、前の祇園精舎の無常堂にまつれる鐘の伝説を組み合わせ、一對の対句を構成する事によつて、一篇の主題の説話文学的造型の姿勢をみせているのである。というように「平家物語」の持つ説話的側面がこの序章においてもかくされているというのである。この指摘は全く適言であると思う。今迄にも「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」から「猛き者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」まで、それは

平家物語の人生觀、世界觀における哲理である。その具
体例として一篇の平家物語が生まれてくる。(註2)

というような考え方がなされてきた。しかし人生觀、世界觀をそのまゝのそれとはみないで、仏教説話にかくされた説話文学者の態度に一寸注意して読んでみる丈でこの序章が生きてくるのである。又、例えばその態度は、序章の分析によつて一層明確となる。この序章の四つの文を形式

的に見ると、第三、第四の文はそれぞれ「ののごとし」「に同じ」と結ばれている点にも明らかのように、いずれも直喩の形式をそなえ、第一、第二の文は各々、「あり」「あらはず」と結ばれ、第三、第四の組合わせのように直喩の形式はとらないが何ものかを「鐘の聲」や「花の色」に託して表現している点でやはり吡喩的な表現になつてゐる。これは説話的な世界を媒介している事は確かであつて、この点からいつても序章における説話性はすでにさしまねかれてゐるといつてもよいと思う。

又、この四つの文が「平家物語」全体の無常觀なる人生觀の説話性を内包してゐると考えられてきたがそれを裏書きするものとして、具体的にその理論の根柢として「遠く異朝をとぶらへば……」以下に例示されている。これは清盛をひき出す為の先蹤譚と思われ、印度伝来の説話に支えられた序章の判断をさらに中国、日本という当時としては世界的な視野の中で歴史的な展望において事実を列挙しつつ檢証し、「盛者必衰のことはり」が時空をこえて貫徹せられてゐる事を物語つてゐる。今迄「平家物語」の説話的性格」について述べてきたが、その側面は重視されねばならぬけれどもその説話性の根柢には「平家物語」を貫ぬく作者の持つ無常觀は輕視してよいのではない。むしろ逆であつて作者自身の持つ無常觀があつてそれを説話的姿勢によつて語らうとしてゐると考えるのである。

ところで「猛き者も遂にはほろびぬ」の「ぬ」の解釈については色々な方法がある。完了し実現した事実を表現しているのだとつて「猛き者も遂には滅んでしまつた」と訳す例と、将来に属する事ではあるが、すでに滅亡が確定的な事実と考えられる場合、「滅んでしまふ」と訳せるし又一つには、理法とか法則とかを強調する意味で「滅んでしまふものである」とも訳せる。この三例のうちいずれをとるかによつて巻頭の文章の解釈法が微妙に違い違つてくると思われる。

石母田正博士はこの「ぬ」は「灌頂巻」の有無或は「平家物語」の側面性によつてとり方が異なるとして、

巻頭の一節を灌頂の巻と照応させて、盛者必衰、諸行無常の理法をのべたものと考え人は、後者の説をとるだらうし、反対に「それよりしてこそ平家の子孫は永く絶にけり」に照応すると考える人は「滅んでしまつた」と訳す側に傾くだらう(註3)

と述べておられる。つまりこの巻頭の文章は諸行無常、盛者必衰の理法、即ち作者の世界観と理想を述べている点で平家物語全篇がここに要約されており、末尾の灌頂の巻と首尾照応して物語の統一が保たれていわれているようなこれ迄の説に対し、氏はこの「祇園精舎」の句は「六代被斬」の「それよりしてこそ平家の子孫は永く絶にけり」の最後の文章と対応していると考える方が自然であるという風に

考えているのである。つまり

平家物語全体の骨組みというものを考える時、私は六代が斬られて平氏が滅亡する物語が全体の骨格を形成している不可欠の一部をなすとみるのに対して、灌頂の巻は平家の筋肉にあたる部分ではあつても骨格の一部ではないと思ふのである(註4)

と述べられ、「平家物語」の叙事文学としての側面を重要視していられるのである。

私は「平家物語」というのは、成立年代、作者が不明で、第一有力候補の信濃前司行長は十一世紀初頭の人で、三巻↓六巻↓十二巻と次第に増補され、灌頂巻成立して現在のものとなつたのは十四世紀の事らしいという事は大体頭に入れて又そう考えると平家物語の抒情文学としての側面は決して見逃してはならないと思ふのであるが、この「猛き者も遂には滅びぬ」の中に平氏を含めて滅亡した過去の人々のこと、或は既に完了してしまつた特定の一回的な事柄を、すでにその中に含めて語られていると迄はみなくてもよいのではなからうかと思ふ。この巻頭の四つの文は極めて均齊のとれた対句表現であり、しかもこの文に先行する文、及びこの文に続く「偏に風の前の塵に同じ」に至る迄の表現が思想を表現している以上、「ほろびぬ」文が特に対句の中で均齊を破るとは考えられないと思ふのである。そこで私は「猛き者も遂には滅んでしまふものである。」と訳し

てよいと思う。そしてこの対句の中にも作者自身の理法、即ち平家物語自体の無常観が盛られていて、叙事文学としての側面のみに目をむけてはいけないと思う。

又「祇園精舎」の文は、今様形式従つて、伝統的な和歌形式に由来する七五調のくり返しによつて語り出されている。この和歌的な情調的表現つまり詠嘆的な調べは「平家物語」の全体を貫ぬく一つの基調音である。そしてこの表現のあり方は他方では漢文訓読体に近い形式を殆んど一貫しているうえに対句表現という点でも一貫性を持つている。この文体の特徴は、これ迄の物語文学等の和文体の機能に比較して論理的分析的な表現に適し、思想表現にふさわしいという事ではなからうか。つまり冒頭の四つの文の組み合せからなる序章は仏徳や教理を讃嘆する四つの偏文に源を求めているのは、作者自身仏教的な一つの理念を持つていてそれが物語全体に流れているのではなからうかと思われる。

以上のように「平家物語」序章を解釈、分析してみると種々の側面がとり出されてくる。しかし結局序章に表現されているものはその詠嘆的な調べや説話的発想、或いは抒情性等の多面的な表現の根底に流れている「諸行無常」

「盛者必衰」「奢れる者久しからず」「猛き人も遂には滅びぬ」の四つの言葉であり、これが平家全巻を貫く大眼目の一つであると思う。作者が高く掲げた「諸行無常」の

人生観は、平家の場合においては特に「盛者必衰」の事実立脚しているのではなからうか。そしてその「盛者」というのは「奢れる者」であり「猛き人」である。そしてそれも決して単に権力があつたとか勇猛心に富んでいたとかいう丈の意味ではなく道義の上において欠けているものがあつた事を意味している。その最もひどいのが清盛であり「伝え承るこそ心も詞も及ばれね」と作者は驚嘆の声を発している。そしてかゝる道義に背いた行為をしたればこそ平家は滅亡したのである。と作者はみたのであると思われる。「灌頂卷」に平家一門の滅亡と殘党の漂泊とを語つて

是は入道上一人をも恐れず、下は萬民をも顧みず。死罪流刑、解宮停位、思うように常に行はれしが致す処なり、これは父祖の善悪は必ず子孫に及ぶということは疑ひなしとぞ見えける（御往生）

といつているのがこれであり、平家の一門が悲惨な末路をみたのは清盛の犯した悪業の果報であるとしたのである。従つて私は「祇園精舎」章中の清盛に関する文句と今ここに掲げた「灌頂卷」の「御往生」の章の文句とは前後照応すると考えられると思う。「祇園精舎」の章の論理と論理とをこういうように解釈する事が正しいとするならば「平家」の作者が最初に掲げた思想的原理である「諸行無常」は決して萬事を否定するというような消極的な漫然たる厭世観ではなく、どこ迄も仏教思想にベースをおき、かつは

論理に立脚した道徳的無常観であつて作者自身のものとあ
ると考えられるのではなからうか？そして又「平家物語」
の構想は最初から一切のものが滅びにおいて自らを貫ぬく
という原理でもつて展開せられる。故に「祇園精舎」の構
成は「平家物語」序章の無常観がこの物語の展開の方法つ
まり創作方法を最初からいかに根底的に捕えていたかとい
う事を示していると思う。換言すれば序章にみられる無常
観の表現は、一見常識的な無常意識の表白にすぎないよう
でありながら、実は抽象化された観念的な思想文等よりは
もつと深刻な無常の自覚に媒介せられないでは成り立ちえ
ない運命観の表現であると思う。

(2) 無常観について

先に「平家物語」に於ては、説話的性格がいかに根底的
であるかを述べた。その事から叙事詩的文学たる「平家物
語」へのアプローチを示唆するものであるが日本古典文学
大系本の「平家物語」序章の補注には、同じ序章が表現し
ている筈の無常観としての思想的側面については何ら特別
の解説も施されていない。むしろこれに対しては文学的な
読みの立場から敏感に警戒的である。このことからしても
巻頭序章の表現する無常観の思想的意義は「平家物語」の
文学的な独自性や少くともその積極性と不可分のものとし
ては捕え得ない立場にある様に思われる。この様に「平家
物語」序章に表現せられたこの物語の無常観の思想的意義

をとりたてては問題にせずむしろそこから生れる誤解を警
戒しようとする立場は、例えば石母田正氏が「平家物語」
（岩波新書）の中でこの無常観を当時の一般的な常識にす
ぎないものとし「作者が名文でもつて書きたてゝいる厭世
思想などにだまされてはならない」（註5）と警告してい
るのとほぼ共通する考え方といえそうである。

「平家物語」序章の思想的意味についての以上のような
意見は古くは小林秀雄氏の「無常という事」の中の「平家
論」がこの点にふれて

平家のあの冒頭の今様風の哀調が多くの人々を誤らせ
た。……彼はただ当時の知識人として月並みな口を利い
ているにすぎない（註6）

などと説き文学と思想とを引き裂こうとした立場と共通す
る側面を持つており、単なる平家論をこえた文学にとつて
本質的な問題を喚起してると思われる。

又「平家物語」序章への同意見として谷宏氏は

我々が平家物語の実質を規定しようとするなら少なく
とも序に関する限り、それは治承、寿永内乱の前夜にお
ける伝統的な社会の破綻の物語といへば平家物語「平
家一門の「無常」の物語という見方は本質を誤つている
という事になる（註7）

と述べておられる。三氏共「平家物語」の叙事詩的側面を重
要視されて当時の混乱した末法思想の社会に注意をひいて

いられるのは秀れていると思う。しかしそれはあまりにも叙事詩的性格にのみ目を走らせすぎ「平家物語」序章に内在する世界観的或は思想的意義を軽視しすぎるのではなからうか？なるほど平家滅亡を書いた大叙事詩である。だからといつてそれが当時の無常観にすぎないとしたり、名文の対句にだまされてはいけないとかいう思想的意義を否定できないと思うのである。なるほど序章の対句は名文である。そしてそこに描かれている思想は当時の末法的宿命論であり厭世思想であるかの如く思える。平安朝の伝統的な体制秩序が平氏という一武士団によつて破られ、混乱してしまつた時代に対してこの世を嘆きはかなんでいる様な当時の貴族達の典型的な無常意識を描きその衝撃的な事件を描くのが主題であるかの如く思える。しかし私は思うに、そのように消極的な人ならどうしてこの様な確固たる物語がこの混乱した世において描けたのであろうか？疑問である。そこで序章の持つ思想的意義を鮮明に理解する為に「平家物語」と同時代の文献により当時の無常意識を比較してみた。先ず原作者を入道行長に想定した場合、彼が出家前にその家司を勤めたとされる九条家の兼実、彼には治承の内乱で当時の最高貴族かつ政治家として対処して「玉葉」という日記が残されていて、又この「玉葉」が「平家物語」の直接の資料らしく、各所に同様な記録を含んでいる。そこで両者を比較してみると一見同じ事を述べている如く

思えるがしかし「理」のもとに事態の進むのは人間としてやむを得ない災難であり、その結果は「悲哉」「宿業可レ悲」でしかなくそれを消極的に受けとめているにすぎないのである。

又、行長が出家後彼を扶持したと伝えられる九条家出身の慈円の作である「愚管抄」ではどうであるかというに、すでに治承の内乱も収まりこの事件を過去のものとして展望しうる時点に於て書きすゝめられ、平家の都落ちに對しては客観的である。「玉葉」の著者の動顛するような狼狽や嘆息もなく又「平家物語」のような没落する平家によりそつた深い嘆きもない。これらの叙述には人間との対立が稀薄でありその末法思想に依る運命観も終始一貫されてない。身分の上では行長は兼実、慈円らの傘下にあつても作品としては「玉葉」「愚管抄」とは同列に置く事出来ない精神の飛躍があり、無常観を通して運命に於けるほろびの思想をもつとも積極的に確認し得ていてその点では「平家物語」は中世的世界が最も鮮明に展開せられていくといえると思う。

(3) 「方丈記」の序章との比較

ゆく河の流れは絶えずしてもとの水に非ず淀みに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止まりたる例なし
(方丈記冒頭)

これと「平家物語」の書き出しは大体同時代に完成した

ものであり、その朗々と誦すべき名文は中世文学の書き出しの双璧といわれている。この二つの作品の關係は從來論ぜられたところであるが、佐々木八郎博士は

平家物語の文章の中には、例えば流布本の本文にみるように、方丈記の本文と一致し或は類似しているものがあるがそれらは平家が方丈記を措撫してその文章を修飾したものであること、然しこれは平家の原作者によつて為された修飾ではなく、原作又は原作に近い時代の平家物語は本文の上においては決して方丈記の本文を撰り入れる事なく両者間は全く没交渉であつたこと。かくして平家の文章は、原作から時代が下るにつれていつの時代にか後の添削者や改作者によつて方丈記中の文章が措撫せられ著しい潤色が施されて文章が甚しく変化したこと

(註8)

と研究されていて、この二つの作品間には影響關係はみられないようである。私は今迄この二つを当時の無常觀の代表的なものとして受けとつてきた。しかしこれら二つの作品間には無常觀の捕え方、つまり否定的契機をいかに対決したかの相違で問題が生じ、二者は異なつてくるだろう。

そして二者はそれ自体の各々の中世的世界を文学的に形成しているに相違ない。しかし、石母田正氏は二者間の無常觀は本質的には同じ立場に立つものと述べられている。

鴨長明もこの内乱を都で経験し、かつ消えかつ結びな

がら流転する人の管みの愚かさ空しさを方丈記の中に記している。その無常觀は、平家の作者のそれと本質的な違いがある筈はないが平家物語と方丈記は質を異にする。後者も散文の文学であり、内乱時代の都に起つた天変地異や福原遷都のような歴史的事件、いいかえれば平家と同じ性質の素材と経験を扱っているが二つの文学の間にある違いはどうして生れてくるのか。方丈記の作者の特徴はたえず自己反省的であり内面的であり道德的である事にみられるといつてよい。ところが平家の作者はたえず無常や生の空しさを説き、悲哀の感情を歌いあげていながら方丈記とは反対に彼の眼はたえず外へ外へと向つていたのである。一口にいえば彼は人間が面白くてたまらない性質なのである(註9)

と述べてある。しかし私はこの二つの作品の無常觀は少し異なつていと思う。「方丈記」に描かれているのは作者鴨長明の經驗的な世界に限定されているにすぎない。そして方丈記の無常觀も「平家物語」のそれと比較しつゝこの点から捕え直す必要がある。

又「平家物語」序章の「祇園精舎の鐘の声」から「盛者必衰のことはりをあらはず」に至る迄の文章が「往生要集」に引用されている「金剛經」や「大經」の「一切有爲、法、如夢影泡影、如露、亦如電、云々」又「諸行、無常ニシテ是レ生滅ノ法、生滅滅シテ寂滅ナルヲ爲メ樂ト云々」とす

る四つの偈文、或は「往生講式」に「朝開^{ツキ}榮華^ニ暮^ニ無常^ノ之風^ニ、宵翫^{ニシテ}朗月^一、曙^ニ隱^ニ別離^ノ之雲^一、一生^ハ是^レ風前^ノ之燭^一、万事^ハ春^ノ夜^ノ之夢^一」とする等の広く伝承された仏典に系譜をたどり得る事が出来る。「平家物語」序章の語るところはこれら經典の表現するところと連絡があり、形式的には殆んど同じものであるように見えながらここには既に質の轉換がはじまつている。というのは方丈記の場合、彼岸世界への上昇のみ作用してゐるが、平家ではほろびを約束されながら、なお行動してやまぬ現実世界の下降に作用してゐるのである。この序章が観念的な無常觀の表白にとどまらず、説話性をふまえて語られてゐるのは序章の現世への通路がすでに開かれてゐるといえるであらう。ここに「方丈記」との大きな差異があると思われろ。そして又大きな差異は「平家物語」の序章の思想は、灌頂巻に呼応し序章のみで終つていないという事である。つまり往生思想の厭離穢土、欣求淨土の宗教思想が貫徹され平家興亡の史譚を、一段高い仏教的な眼から眺めて書きつゞつてあるのである。そしてそれは語りの文学として衆聞の中へ透浸してゆき変革期にふさわしい叙事詩的作品として実現してゐるのである。

(4) むすび (序章の意義)

ある事が成功するか否かという事はその出発の第一歩に大きく左右されるという事は勿論である。それではこの「平

家物語」の序章ではどうであらうか？この膨大な作品を支える伏線となり得るだらうか？

私は成功してゐると思う。この美しい文章を眼をつぶつてくり返してみる時、それは祇園精舎の鐘と、沙羅雙樹の花によつて一つは聴覚的に一つは視覚的に諸行無常の理を書いたものとして浮び上つてくる。その韻律的な華麗さ、あわれさは一種の宗教的香気をさえ持つていて魅力的である。その美しさに用心しすぎて文学と思想とを引き裂こうとした立場が出てきたが、これは名文の中に隠されてゐる思想的意義を軽視しすぎた見方であり正確ではないという事は前述した通りである。その中には「平家物語」全体を通じる人生觀世界觀の哲理が述べられていて灌頂巻と呼応する事によつて一層序章としての価値があると思われる。

それでは序章がもしなかつたらどうであらう。私はきつと纏りのない叙事詩と思うのではなからうか？平家一門に費される語句も時には美辭麗句であり年代であり、元來の仏教思想をくみとる事が出来なくなるのではなからうか。同時代の「玉葉」や「百鍊抄」や「山梔記」等により史実としての「平家物語」を検討した場合、必ずしも真実を歪曲してゐると思えない所が多々ある。その大部分は史実として或は發展させたものであり、それは当然文学としての効果をねらつてゐると思われるのである。それによつても、叙事詩的性格丈では価値がないという事

がわかる。そして序章はその思想を重要視する面からいつても不可欠のものである。

又説話的側面からみても序章によつて既に説話的な世界の媒介されているという事は前に確認した。そして物語中の一つ一つが充分独立し得るものがあるとしても平家興亡の史実を描くという事が主題であるという点からみると序章の引き出ししている清盛が必要であつてその構成の巧みさには感嘆せざるを得ない。この様に序章が不可欠のものであるという事からしても序章は「平家物語」に於て重要な位置を占めるものであり、思想的面を重視するに当り意義あるものだといつてよいのではなからうか。

以上述べてきたように、序章の表現に集約せられる作者主体の広義に於る思想的意義をこれ迄に受けとられてきたよりもつと積極的に捕え直す事が、「平家物語」を理解する為の一つの重要な手がかりとなると思うのである。又その事を「平家物語」という作品自体が逆に我々に要求していると考えざるを得ないのである。

- 註1、平家物語 古典文学大系32 岩波書店
註2、平家物語の研究 佐々木八郎著 早稲田大学出版部
註3、平家物語 石母田正著 岩波新書 P 37
註4、平家物語 石母田正著 岩波新書
註5、〃 〃 〃
註6、無常といふ事 平家論 小林秀雄著 岩波新書

- 註7、中世文学の達成 谷 宏著 三一書房 P 14
註8、平家物語研究(中) 佐々木八郎著 早稲田大学出版部 P 131 ~ P 132

- 註9、平家物語 石母田正著 岩波新書 P 47

八代集における枕詞の研究

—— その統計的考察 ——

杉 焼 シゲミ

枕詞の呼称は古く、発語、次語、異名、諷詞、枕言などが用いられ、その意味にも広狭があつた。平安時代の「古今集仮名序」や源氏物語などに「枕詞」の字が見えているが、現在の枕詞とはその意義を異にしている。

枕詞が今日の修辭用語となつたのは、室町時代の頃で、親房の「古今集記」に

久堅のあめとは惣じて天を久堅といふ。久しき堅き義なり。かやうの詞は、古語の残れるを今の世に枕詞と名付けて、あながちには、天を不付して只空を久堅と心うる
と見えているが、「今の世に」とある所から枕詞と呼ばれ